

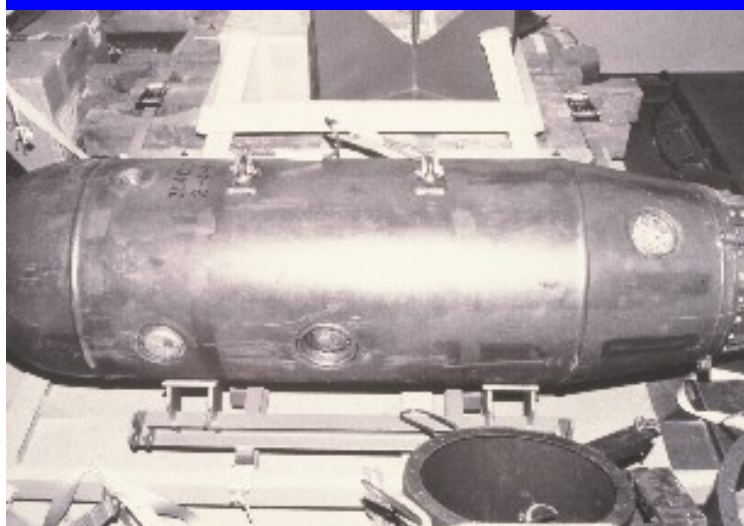
Operation Gulf Dawn

(湾岸の夜明け作戦)

落合 峻 (ペルシャ湾掃海派遣部隊指揮官)

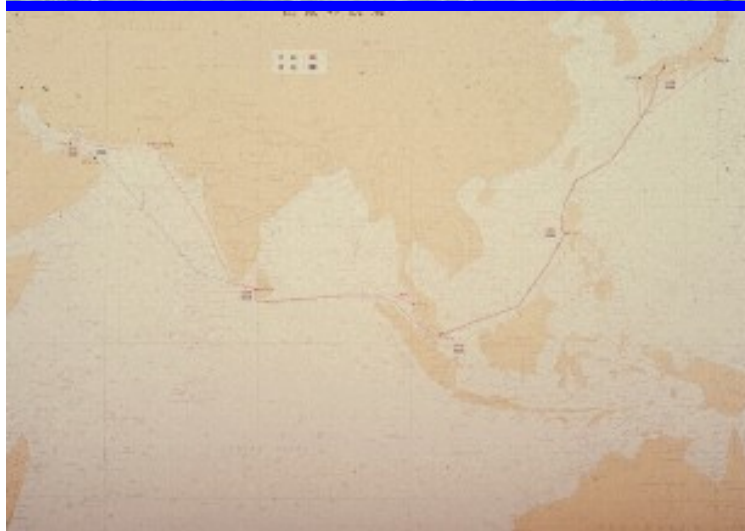
1 出港

平成2年8月2日イラクは突如隣国のクウェートに侵攻し、その全土を占領した。国際的な大非難にもかかわらず6ヶ月間にわたり占領し続けた。国連は多国籍軍を編成し、翌3年1月17日反撃を開始、2月27日クウェートの解放に成功した。この湾岸戦争においてイラクはペルシャ湾北部のクウェート沖合いに約1200個の機雷を敷設した。この機雷はペルシャ湾を航行する船舶に重大な脅威となり、特に輸入原油の7割を中東地域に依存している我が国にとっては深刻な問題となった。



国際社会は我が国に対して、経済大国に相応しい対応を求めてきた。我が国に対して資金面のみならず人的貢献を求める国際世論が高まった。国内においても経団連、日経連、石油連盟、日本船主協会などからペルシャ湾における航行船舶の安全確保についての要請、及び被災国の復興に寄与するための人的貢献を求める動きが急速に高まった。このような状況を踏まえ政府は平成3年4月24日、安全保障会議及び閣議において、自衛隊法第99条に基づく措置

として自衛隊創設以来、初の海外実任務としてペルシャ湾に掃海艇を派遣することを決定した。政府決定の2日後4月26日、掃海母艦「はやせ」、補給艦「ときわ」、掃海艇「ひこしま」「ゆりしま」「あわしま」「さくしま」の6隻、511名の隊員で編成された海上自衛隊ペルシャ湾掃海派遣部隊が、それぞれの母港、横須賀、呉、佐世保を出港した。私はその指揮官を命ぜられた。部隊は一路南下、途中燃料、真水、食料の補給のため、フィリピンのスービック基地、シンガポール、マラッカ海峡を経てマレーシアのペナン、ベンガル湾を横断してスリランカのコロンボ、アラビア海を北上してパキスタンのカラチに寄港し、ペルシャ湾の入口ホルムズ海峡を経由、一ヶ月と一日後の5月27日補給基地となるアラブ首長国連邦のドバイ、アル・ラシット港に7,000海里の航海を経て入港した。ここで長期航海態勢から機雷掃海態勢に準備を整え、多国籍海軍部隊との作戦会議の後、クウェート沖の現地に向け進出、6月5日から機雷掃海作業を開始した。



2 掃海作業

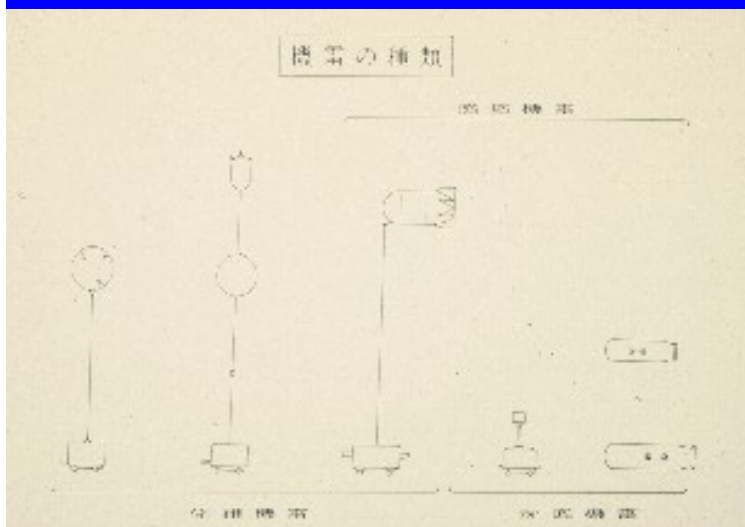
この機雷をアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、イタリア、ドイツ、サウジアラビア及び日本の9カ国から派遣された約40隻の掃海艦艇が共同して掃海を行った。掃海担当海域の割当、作業実施上の安全確保、作業効率の向上、成果の確認及び共同連携要領等の調整のため、何回となく各国指揮官及び幕僚による作戦会議が行われた。



掃海作業は綿密な計画のもとに、各国の掃海艦艇が一致協力、整々と実施された。当時のペルシャ湾は丁度6月から9月という1年中で最も暑い時期であった。高温多湿でかつ最高気温が50℃、海水温度が35℃、塩分濃度は日本近海の2倍、おまけに湾岸戦争の末期にイラクが火をつけたクウェートの油井がまだ約260ヶ所も燃えており、そこから舞い上がった煤煙が空を覆い、また砂漠からのパウダーのような細かい砂塵が飛んできて各艦艇の吸気口のフィルターを詰まらせてしまうという有り様であった。それに加えて海中に敷設された機雷は、いつ爆発するか判らないという状況であった。このような劣悪な環境下において派遣部隊の6隻の艦艇、511名の隊員たちが行った作業は将に3K（きつい、きたない、きけん）の最たるものであった。毎朝4時半に総員起こし、5時出港、日の出の5時半にあわせて機雷危険海域に進入、ただちに掃海作業を開始し日没30分後の夜7時半まで延々14時間、機雷との緊張した戦いに挑む。万が一の触雷という最悪の事態に備えて不燃性の長袖の作業服を着てヘルメット、救命胴衣、防塵用の眼鏡とマスクを装着する。40度近い気温の中でこれを装着すると約2分後には下着まで汗びしょりになる。当直は2時間ずつ3直制だが非番直員の待機場所は、触雷時の人身被害を最小限にするため露天甲板とし、昼食も朝早く出港前に造った弁当を真夏の太陽の照りつける露天甲板で取った。



今回の掃海作業で我々が処分したイラクの機雷は磁気機雷、音響機雷、磁気音響複合機雷及び係維機雷であった。掃海艇に装備されている機雷探知機で海中に潜む機雷を探知し、処分用爆雷を抱いた機雷処分具を有線誘導し機雷まで潜航させ、処分用爆雷を機雷の傍らに設置する。機雷処分具を揚収し、掃海艇が安全海面に離隔後、調停した時間に処分用爆雷を爆発させ、機雷本体に入っている数百キ口の炸薬を誘爆させて処分した。また係維機雷は水中処分隊員が潜行し、機雷缶に炸薬を取り付けた後、遠隔発火装置で爆破処分した。



機雷掃討



一日の掃海作業が終わり各掃海艇は夜8時頃、母艦「はやせ」に横付けして真水、燃料生糧品を受領後それぞれの錨地に着く。それから遅い夕食を済ませ、真水搭載量の少ない掃海艇のこと乗組員たちは限られたわずかな水で顔を洗い身体を拭き、11時頃やっと疲れた体をベッドに横たえる。苦しい作業の連続であったが隊員達は一言も不平も言わず黙々と自分の任務を遂行した。また共同作業を通じ8カ国の隊員達とは国旗、顔、肌の色の違いに全く関係なくともに海を職場とする男たちの共通の脅威である機雷に対し、ともに肩を組んで立ち向かうといった一体感、所謂NAVY TO NAVYの精神から極めて仲良く気持ちの良い関係で仕事ができる。作業は順調に経過し約3ヵ月半でイラクの敷設した1200個の機雷はすべて処分された。平成3年6月5日から開始されたペルシャ湾掃海作業は一件の事故もなく100%の

任務稼働率を維持し、9月11日無事に完了した。

3 国際貢献

派遣部隊が現地に到着した5月頃、ペルシャ湾の湾岸諸国では、「湾岸の復興に貢献してくれた国に感謝する」ということで、背中に湾岸の復興に貢献した各国の国旗が描かれたTシャツが売られていた。約30カ国から派遣された各国艦艇の乗組員たちは上陸するときに、自国の国旗が描かれたTシャツを着て繁華街を闊歩していた。しかしすでに130億ドル(約1兆5千億円)を支払っていた我が国の「日の丸」は残念ながら描かれていなかった。われわれが掃海作業を始め、そのことが現地で報道された6月になると、そのTシャツのマークに各国の国旗と並んで日の丸が入られるようになった。資金提供のみの協力と、実際、現地に来て作業に参加する協力との効果の差をつくづく思い知れされた。

左は派遣前のTシャツのマーク



下は派遣後のTシャツのマーク(日本国旗入り)



各国指揮官及び幕僚が集まり何回となく作戦会議が開催された。昼間の会議の後夕刻からは懇親会が行われた。初めのうちはお互いに遠慮がちであったが、回を重ねるごとに親しくな

り、しかもアルコールの力も手伝ってお互いに本音の話をしあう様になった。やはり経済大国の日本の国際貢献が話題となり、かつてのイ・イ戦争に於いてペルシャ湾航行の日本タンカーをアメリカやNATOの海軍艦艇が護衛したことについて話が及び、「自国のエネルギー源の70%をここ中東から得ている日本のタンカーを守るために何故アメリカやその他の国の若者が血を流さなければならないのか」に始まり、今回の湾岸戦争に対する日本の対応についても同様の批判が多かった。

「日本人だって130億ドル、つまり日本国民一人が1万円ずつ払って立派に国際貢献しているんだ。」と開き直っても、彼等から「一人1万円か、ニアリー・イコール百ドルだな。百ドルさえ払えばペルシャ湾にこなくていいのであれば、俺は今ここで百ドルはらってやるよ。」と反撃を食らって返す言葉もなく、悔し紛れに、ただただ、カティシャークの水割りをがぶ飲みしていた私であった。

9月初めクウェート政府の招きで派遣部隊は首都クウェート・シティのアル・シュワイキ港に入港した。その際クウェートとイラクの国境付近に設置された国連停戦監視団司令部を表敬訪問した。当時約35ヶ国からの約750名の隊員たちが停戦監視業務に従事していた。司令官のオーストリア陸軍グラインデル中將の説明によれば、両国の国境線に沿ってクウェート側に5キロメートル、イラク側に10キロメートルの非武装地帯を設けて、そこに26ヶ所の停戦監視所を設置し、中佐を長とした一チーム5名が一週間交代で監視業務に当たる。砂漠という劣悪な環境下で、停戦監視という緊張の連続の業務を一週間続けると、隊員たちは憔悴しきって帰ってくる。司令官の「規模の大小、期間の長短は問わない。一人でも二人でもよい、できるだけ多くお国から一人でも多く参加してくれれば皆が助かる。」という言葉が強く印象に残った。国連の停戦監視団に隊員を派遣している国は300名から1000名規模で3ヶ月から6ヶ月間の期間で、アメリカ、イギリス、フランス、カナダ等といった錚々たる先進諸国ばかりと思っていたが、フィジー、ナイジェリアといった国からも隊員が派遣されており、事実それらの国々は立派に国際貢献していると感謝され高く評価されていた。やはり国際貢献は「命の危険を侵すのは、そちらに任せるから、こちらは少々金を出そう。」では済まされないものであり、互いにスクラムを組んで額に汗を流し共にリスクを分かち合うことだということを感じた。

4 隊員達の健闘

(1) 水中処分隊

Operation Gulf Dawnで34個の機雷を処分した。水中テレビを装備していないわが部隊は、機雷探知機で探知した目標が確実に機雷であることを確認するためには、どうしても水中処分隊員の視認に頼らざるを得なかった。目標が何という機雷で、どのような状態で敷設されているのか等の情報を得て、安全かつ的確に処分できたのは水中処分隊員達の自己の使命に対する強い責任感と、安全を確保しつつ機雷に接近し、炸薬を取り付け遠隔爆破させる、高度の技術力に裏付けられた勇気ある実行力に拠るところが、極めて大であった。

(2) 医官

派遣部隊には3名の医官が乗り組んでいた。過酷な環境下で危険な掃海作業に従事する大勢の隊員たちの誰か一人が、身体的あるいは精神的な不調から集中力を欠き、作業中にケアレ

ス・ミスをするると大事故に繋がる。その意味で全隊員の健康を心身ともに良好な状態に維持する事は、本作業の成否にかかわる大切な要素であった。188日間に及ぶ本派遣期間中、511名の隊員たちが何かの原因で医官の診断を受けた人数は合計3700名に達した。医官達は様々な制約を克服し見事にその任務を果たした。派遣部隊の隊員達ばかりではなく、一緒に掃海作業をしていた外国海軍の隊員達の健康管理にも、多大の貢献をした。或る日の夜、日本部隊のすぐ北側海域で掃海作業を実施中のドイツ掃海艇「ゲッチンゲン」から急病人が発生したので患者を診察してほしい旨の連絡が入った。真夜中の2時に「ゲッチンゲン」が「はやせ」に横付けし患者を医務室に収容した。医官は診断の結果、緊急に大病院に入院させる要があると進言した。直ちに米軍と連絡をとりヘリコプター派遣を要請、患者をサウジアラビアの病院に入院させた。医官の適切な判断がこのドイツ隊員の命を救い、彼は大いに感謝された。



(3) 予防整備

本行動中、各艦艇は100%の任務稼働率を維持した。しかし、重大な事故の原因となる故障の芽は、実は316件も発生していた。主機、補機まわりはもとより通信機、電子機器、掃海具等さまざまな不具合が生じた。揚掃機の電動機のコイルの銅線の巻き替え、処分艇の舷外機の発生雑音低減まで、すべて隊員達の手で修理し故障を復旧させ。一日の作業が終わり夜遅く描地に着いてから、明日の掃海作業に備えて自分の整備担当機器の予防整備を励行した。

掃海艇は洋上補給装置を持たないため、隊員達は自分たちで創意工夫し、縦引き曳航方式による給油、給水装置を作成、見事に航海中の燃料、真水の補給をおこなった。

浮遊機雷の漂う現地海域での描泊に備え、各艇は防雷ネットを回航中に造りあげた。派遣部隊が188日間100%の任務稼働率を保ち行動できたのは、こうした黙々と誠実に任務遂行に励んだ縁の下の力持ちの隊員達のお陰である。

(4) 逞しい強者達

派遣部隊の隊員達の年齢は最年少18歳、最年長52歳、平均32.5歳であった。結婚適齢期の若者が多く乗り込んでいた。半年前からホテルを予約して5月の連休に結婚式を挙げる計画を考えていた。しかし、日本出発は4月26日と決められた。結婚式を予定していた隊員は躊躇なく自分は任務を優先させ、敢然として機雷への挑戦を選択した。またフィアンセもその決断を支え、じっと待ってくれた。

娘の結婚式を連休中に予定していたベテラン隊員は、愛嬢の晴れの門出を遙か南シナ海の洋上から祝福した。

188日間に及ぶ派遣期間中、隊員の留守家族に12名の新しい生命が誕生し、7件の不幸があった。不幸があった家族から隊員あてに申し合わせたように、「お前はペルシャ湾でベストを尽くして来い、こちらは大丈夫、心を残すな。」とメッセージがあった。

ペルシャ湾で18歳から19歳を迎えた若い隊員達が約50名乗り組んでいた。この若い隊員達が現地ですら約4ヶ月間従事した掃海作業は将に3K(きつい、きたない、きけん)の最たるものであった。しかし、彼らはただ一度も痛い、帰りたい、辞めたいなどの不平を一言も言わず、元気一杯、一生懸命働いた。

「最近の若者は・・・」の後は「何と立派なのだろう」と私は続けたい。

派遣部隊の日本出発に際し父母は戦後日本初の国際貢献実任務に赴く息子の晴れの姿を横須賀の岸壁から見送った。その直後、母が急逝した。

父は日本の為に勇躍任務に付いた息子に精神的な動揺を与えてはならないと考え、この悲しい事実を知らせなかった。5月9日派遣部隊は補給の為にシンガポールに寄港した。父は私に面会を求めた。「息子が動揺してはいけない。直接私の口から息子に伝えたい。息子に会わせてほしい。」

父は息子に悲報を伝えた。彼は悲しみを胸に秘め、それから5ヶ月間にわたるペルシャ湾に於ける掃海作業においてもっとも危険な仕事、つまりアクアラングを装着し、潜水して機雷に爆薬を取り付けてくる水中処分隊の隊長として、大活躍をした。掃海作業終了後、彼は米海軍から表彰された。10月30日、父は息子の帰国を呉港・Fバースで母の遺影と共に迎えた。日本で隊員の帰国を心配しながら、首を長くして待っている家族に、少しでも不安の解消に繋がればと思いペルシャ湾における隊員達の活躍状況を知らせるため、私は現地から留守家族に暑中見舞いを出した。妻帯者は奥さんに、独身隊員はご両親に、ご主人のあるいはご令息の元気な働き振り、家族からの手紙が一番の励みになる旨を伝えた。約80%のご家族から返事を頂いた。その中に素晴らしい一通があった。ある独身隊員の母親から、「隊長さん、ご丁寧なお便りをありがとうございました。お心遣いをいただき感謝いたします。うちの息子がペルシャ湾に行っていることを隊長さんのお便りで、初めて知りました。どうか、よろしく・・・。」という主旨であった。私はこの便りを読んで、「なんとも、逞しい強者が我が部隊にもいるものよ、これならば我がOMF(OVERSEAS MINESWEEPING FORCE)も

安泰だ ” と思った。

掃海作業実施期間中、連携をより密にし掃海作業を円滑に実施するために、米海軍とお互いに連絡士官を派遣しあうこととなった。中東艦隊司令部に連絡士官を派出することは、日本を出発する時点で判っていたので、予めその要員を確保していたが、現地に到着後、米海軍掃海部隊司令部にも一人派遣することとなった。その要員を確保していなかったため、その人選に頭を悩ませた。米海軍掃海部隊旗艦に乗り組み連絡士官として日米両掃海部隊の共同作業について細部にわたる調整を行う、キリキリと神経をすり減らす苦勞の多い任務である。掃海隊付勤務の一人に白羽の矢を立て、彼を口説き落とす。英語が特別に堪能な訳でもない彼はそれでも元気に、旗艦「トリポリ」に乗り込んでいった。彼を送り出したものの、後が心配であった。緊張が続く激務だから派遣期間は長くても一ヶ月で交代させる必要があると思い、次の要員の人選を考えていた。一ヶ月後作戦会議のため米海軍掃海部隊の旗艦「トリポリ」を訪ねた折り、同司令部で勤務する彼と会い、「ご苦勞さま、疲れただろう、どうだ交代するか」と尋ねたところ、「いや大丈夫です続けます。」と元気な笑顔が返ってきた。彼はとうとう3ヶ月間1直配置で、この厳しく苦勞の多い連絡士官の仕事をやり返した。そればかりではなくその間に米海軍の掃海艇のOPERATIONの状況や司令部の作業要領をつぶさに勉強し立派な報告書を作成した。これが後日、我が掃海部隊の貴重な資料となったことは申すまでもない。こうした強者たちの活躍がOMFを支えたのである。

補給艦「ときわ」はクウェート沖で掃海作業を続ける掃海母艦「はやせ」と4隻の掃海艇に食料、燃料、真水及び日本から送られて来た家族等からの手紙や荷物を、継続的に補給する為、約五百マイル南方の補給基地アラブ首長国連邦のドバイと掃海現地を何回も往復した。劣悪の環境下で苦しい掃海作業に従事していた乗組員にとって、「ときわ」が運んでくれる新鮮な野菜や真水そして家族からの手紙は何よりも嬉しく待ち遠しかった。遙か南の水平線に「ときわ」の艦影が見えてくるのを、隊員達は「今か今か、」とまちこがれていた。しかし、当時のペルシャ湾には係維索が切れた機雷缶が流れており、船舶の航行には危険を伴っていた。浮流機雷の漂う危険な海を掃海部隊を支えるため「ときわ」は用心深く、警戒航行を続けた。浮流機雷発見のために、艦首に見張り員を配置し、細心の注意をもって航行する事を余儀なくされた。その見張り員が浮流している機雷缶を発見できず、不幸にして艦にぶつかりでもしたら、大きな被害を被ることになる。通常見張りという仕事は若い隊員の受けもちであるが、派遣部隊では、各分隊の前任海曹といったベテラン隊員達が私や各隊司令、各艦長が強制したわけではないが、自発的に「若い者は少なくとも俺達よりも長生きする権利がある。俺達が立とう。」とあって、この危険な任務を自らかってでた。ベテラン隊員の率先垂範が部隊の士気を高揚させた。若い隊員達は、こうした先輩隊員の背中をみながら成長していくのである。



5 エピソード

(1) 在留邦人

今回のペルシャ湾掃海作業を通じて私は予想もしなかった事を経験した。それは湾岸各国の在留邦人達が我々の活動を心から喜んでくれた事である。この在留邦人達は現在の日本経済の繁栄を最前線で根っこから担いでいる人々である。この人々が今回の湾岸戦争で大変な苦勞をした。イラクのクウェート侵攻以来、多くの国々は自国民救出の為船や飛行機を派遣する等の様々な努力をした。また紛争終了後も沿岸国復興の為、物心両面にわたり目に見える貢献を積極的に直ちに開始した。そうしたなかで、我が国の対応は必ずしも万全とは言えず遅れがちで、関係国から感謝されるには至らなかった。そのため、現地の日本人達は大変に肩身の狭い思いをしていた。そうした状況のなかで日本から掃海艦艇6隻と511名の隊員達が、他の国々の部隊と一緒に力を合わせて機雷を除去し、ペルシャ湾の航行の安全確保に活躍したのである。何名もの企業商社の支店長がわざわざ停泊中の旗艦「はやせ」に来艦、喜びと感謝の言葉を私に述べていった。また日本人会で使用しているクラブに隊員達全員を招待して、丸一日、朝から晩まで飲みたい放題、食いたい放題の大歓待で慰労会を催してくれた。隊員達は「在留邦人がこんなに喜んでくれるなら、よーし、これからも、もっと頑張ろう。」という気持ちになった。長期間、厳しい作業を続けている男達の心の大きな支えとなった。大使からも「日本人一同、ようやく肩身の広い思いが出来たと、心から感謝しております。」とお便りを頂いた。

(2) 国民の励まし

ペルシャ湾掃海作業中、数多くの国民から心温まる激励を頂いた。日本からペルシャ湾までの約1万2千キロメートルの長距離を飛んできてくれた千羽鶴は2万羽を超えた。慰問品として日本各地から名産品が送られてきた。あの暑いペルシャ湾上で隊員達は思いもよらない故郷の味を感謝の気持ちを持って心から楽しみ、明日の掃海作業への新た健闘を誓った。また各地の老若男女、いろいろな方々から三千通に近い励ましの便りを頂いた。「始めてお便りします。新聞で掃海部隊の皆様の活躍を知りました。暑い中、危険の伴う作業を日本を代表して行っていらっしゃる皆様を、私は誇りに思います。日本人として感謝の気持ちを込めて、有り難うございますと心から申し上げます。どうか無事に任務を全うされ帰国されますように、お祈り申し上げます。遠いペルシャ湾の皆様、これからもどうか日本の為に頑張ってください。」(桐生

市 26歳 主婦) こういった国民の「有り難う、感謝します」「日本のために頑張ってください」という感謝の気持ちと温かい励ましが、あの劣悪な環境下で機雷処分という危険極まりない作業に従事していた、511名の男達の心を支えたのである。

(3) 隊員の本音

隊員達の士気高揚のため「TAOSA TIMES」という部内機関誌を発行した。その部内誌を海幕から留守家族に配布してくれる事になった。ペルシャ湾で苦しくきつい作業に従事している隊員と横須賀、呉、佐世保で首を長くして無事の帰国を待っている家族達を繋ぐネットワークが出来た。単調でかつ厳しい作業の連続の毎日の生活で少しでも心の安らぎにと、その内容は身近に起きた愉快的事とか、懐かしい故郷のトピックスや健康維持の為の医官のアドバイス等様々であったが隊員達はその発刊を楽しみにしていた。皆に一番人気があったのは「ペルシャ湾より愛をこめて、一言メッセージ」という欄であった。隊員達は全員自分の家族あてにメッセージを送った。隊員達の本当の気持ちが良く表れている。「『元気だよ、心配するな』の電話の声で妻は私の健在を知り、『ドカーン』『爆破成功』の声で、世界は日本の存在を知った。無事帰国して私は家庭内で名誉ある地位を占められるであろうか。多分、三日天下でしょう。」一日の作業が終わりベッドに身を横たえる頃「おやすみは太郎の寝顔、淋しいとお前の笑顔」隊員達の正直な本音であろう。

平成3年9月11日ペルシャ湾に於ける掃海実作業が終わった。私はその時、「これでもう掃海作業で隊員が死亡する事はなくなった。後は日本へ帰るまでの一ヶ月半、途中の航海の安全さえ考えれば良い。ああよかった。」と実のところ、何よりもホッとした。同時に隊員達も「ああ、よかった。これで日本に帰れる。」と思った。そして約5ヶ月前、日本を出港した4月26日の朝、艇に乗り込む為にいよいよ我が家から出勤する時の状況を思い出して、こう言っている。「『今日はここでいい』」と自分でドアを閉めた。妻の顔が見られなかった。その妻と、そして父さんは当分帰ってこない、薄々感じていた子供達に、『もうすぐ帰るよ』

あらゆる困難を克服し自己の最善を尽くし、任務を達成した者のみが言える言葉である。

6 精強

(1) 伝統と訓練

クウェートに寄港した際、記者会見が行われた。私が掃海作業の進捗状況について説明した後、地元新聞記者からの質問を受けた。

「クウェート国民は、あなた方に心から感謝している。遠い極東の日本から、こんな小さな船でペルシャ湾まで来て、われわれの為に危険極まりない機雷の除去をやってくれた。心からお礼と感謝を申し上げる。それは其として、日本は第2次大戦以後45年間、戦争をしていない筈だ。それなのにどうしてアメリカ、イギリス、フランスと言ったその間にベトナム戦争、フォークランド紛争、スエズ紛争と言った実際の戦争を経験してきた先進諸国と同等に、機雷掃海と言う最も難しい技術を持っているのか。それとも日本は隠れて戦争をしていたのか」

私は次のように答えた。

「そうではない。昭和20年3月、瀬戸内海を中心として日本近海に約1万2千個の機雷が敷設され、日本海軍はその脅威に敢然と挑戦し、その機雷掃海作業は終戦後も営々と続けられた。それはやがて海上自衛隊に引き継がれ、日本近海に於ける船舶航行の安全確保のために、掃海業務は昭和40年代後半まで、継続された。私自身も若い頃、その掃海業務に従事した経験がある。第2次大戦以後、約45年間も平和が続いた日本の掃海部隊が、先進諸国と同等に実任務につけるのは、旧海軍の先輩達が良き伝統を残してくれたお陰であり、それに加えて任務を引き継いだ海上自衛隊の掃海部隊が、堅実に訓練を励行し、技量を磨いて来た努力の積み重ねがあったからである。」

(2) ストウフ大尉の凱旋

掃海作業期間中、効率的なオペレーションの実施と作業の安全確保の為、各国はお互いに連絡士官を派遣しあった。日本の部隊にはアメリカ海軍中東艦隊司令部掃海幕僚ストウフ大尉が旗艦「はやせ」に派遣された。

彼は中東艦隊司令部及び一緒にオペレーションを実施しているアメリカの掃海部隊との連絡調整等、日本の掃海部隊の為に約3ヶ月間にわたり献身的に活躍し、連絡士官としての任務を100%見事に成し遂げてくれた。日本の掃海部隊が一件の事故もなく、一人の負傷者も出さずに機雷除去という危険極まりない任務を無事に完遂できたことにストウフ大尉は多大な貢献をした。

彼の湾岸戦争戦役の期間が切れる平成3年8月19日、故郷のコネチカット州ウォーターバレイに帰る為、乗艦していた「はやせ」を退艦する事になった。

私は彼に感謝状を贈呈し、献身的な協力に感謝の意を表するとともに、退艦に際し、幹部自衛官の離任退艦に伴う行事と同様に、「総員集合」、「感謝状の贈呈」、「離任披露」そして「総員見送りの位置に整列」、「帽振れ」をもってストウフ大尉を送った。「はやせ」の舷門において、自衛艦旗に敬礼する彼の目に涙が溢れていた。舷梯を離れた内火艇から我々に対して、懸命に日本式に帽子を振る彼の姿が今でも鮮明に目に浮かぶ。

ペルシャ湾派遣掃海部隊は、無事任務を完遂し、9月下旬アラブ首長国連邦ドバイのアル・ラシッド港に於いて帰国の準備にかかっていた。

私はアメリカに帰国したストウフ大尉から手紙を受け取った。その手紙には無事帰国した旨が記述されており、更に次の様な主旨が書かれていた。

「帰国し我が故郷コネチカット州ウォーターバレイに着いた。女房や子供達は大変に喜んでくれた。だがしかし、親愛なるCAPTAIN落合よ、もっといい事があったぞよ。それは市民がオレを大歓迎してくれた事だ。我が町のど真ん中に、オレのために大きなステージが造られ、その壇上に女房と子供達と一緒に登らされたオレを、市長自らがオレの業績を披露し、その功績を称え、オレのことを我が市民の誇りだと紹介した。その後、オープンカーに乗せられ、ブラスバンドを先頭にして町内をパレードした。全市民がオレの凱旋を祝福してくれた。女房も子供達も大喜び、我が人生で最良の日であった。海軍軍人となって本当に良かったとつくづく思い、そして湾岸戦争に参加し国家に貢献できたことを、この上なく誇りに思う。」

ストウフ大尉の手紙を読んで、私は自分の事のように嬉しくなると同時に、胸に熱いものを感じ

じた。アメリカ軍の精強さの根源を将に垣間見た様な気がした。

国の防衛に携わる者は、国民からの絶大な信頼と期待を受けて、国家の為、国家の命令に基づき、身の危険をも顧みず、身をもって任務を遂行する。国家と国民に対して奉仕する事を名誉とし、自分自身の誇りとするのである。そこに強固な使命感が生まれ、精強さが育っていくのである。

さて、それに引き替え、我が国の場合はどうであろうか。一ヶ月半後に帰国し故郷に帰った隊員達を我が国民は、どのように迎えるのでであろうか。

アラブ首長国連邦ドバイのアル・ラシッド港に係留中の旗艦「はやせ」の私室で、机の上に足を乗せ、この5ヶ月間、私と共に戦ってきた指先の水虫を掻きながら、私はぼんやりと、そんな事を考えていた。

7 帰国

掃海作業中、補給基地としたアラブ首長国連邦のデュバイ、アル・ラシッド港に於いて帰国準備を整え日本に向け9月23日同地を出港した部隊は、途中補給の為オマールのマスカット港、スリランカのコロンボ港、シンガポール、フィリピンのスービック港に寄港し、一路母港に向かった。

平成3年10月30日ペルシャ湾派遣掃海部隊6隻の艦艇と511名の隊員は、各種困難を克服し、それぞれの立場で自己の最善を尽くし任務を達成した誇りと部隊を支援し続けてくれた多くの人々に対する感謝の念、明日に備えて更なる錬磨の決意を胸に、188日振りに母港、呉に帰港した。その隊員達を総理大臣は、「諸君の今回の活躍は、我が国の国際貢献の輝かしい先駆けとして、永く国民の記憶にとどめられるであろう。」と、また防衛庁長官は「この静かなプロフェッショナリズムは、関係諸国の称賛の的であり、将に全自衛隊の模範、よくぞ成し遂げた。」と迎えた。

翌31日、派遣部隊の解散に当たり、私は隊員達に敬意を表し饒の言葉を贈った。

『ペルシャ湾掃海派遣部隊の解散にあたり、一言申し述べる。

まずはじめに、「湾岸の夜明け作戦」を勇敢に且つ粘り強く戦い抜いた掃海派遣部隊隊員諸官に、米中央軍海軍部隊指揮官テイラー少将と、我々と共に肩をいただきあい掃海作業を実施した米海軍対機雷戦部隊の指揮官ヒューイト大佐から当部隊に寄贈された機雷に添付されているメッセージを紹介する。

「本日ここに、日本国海上自衛隊の勇敢なる将兵の榮譽を讃え、イラクが敷設した触発機雷UGM-145を贈る。『はやせ』『ひこしま』『ゆりしま』『あわしま』『さくしま』『ときわ』の6隻からなるこの海上自衛隊の部隊は、米国の『Operation Desert Storm』の成功とアラビア海における機雷排除に直接寄与するため、困難かつ危険な海域に幾度となく踏み入ったものである。」



また、米海軍対機雷戦部隊指揮官 ヒューイト大佐からは「北アラビア湾の危険極まりない機雷危険海域において、1991年6月から9月にわたり、米海軍対機雷戦部隊と緊密に連携をとりつつ、勇敢に掃海作業に携わった親愛なる落合司令及び彼の将兵に対し、ここイラクが敷設したUDM機雷を贈る。」

我々と共に作業を実施した米海軍の両指揮官が、このメッセージに述べているとおり、掃海派遣部隊は実に見事に任務を遂行した。

この事を私は指揮官として大変嬉しく思うし、諸官を、この上もなく誇りに思う。

ここで、次の三のことを述べておく。

その第1点は、「感謝の気持ちを忘れるな」ということである。

今、申し述べたとおり、掃海派遣部隊がその任務を果たし得たのは、申すまでもなくここにいる隊員諸官の献身的な努力の結果であることには違いないが、その陰には我々を心から支援してくれた防衛庁、海幕、自衛艦隊、横須賀、呉、佐世保の各地方隊をはじめ多くの関係部隊、また、外務省、寄港地及び湾岸諸国の大使館、在留邦人の方々、あるいは我々に千羽鶴を、メッセージを贈り暖かく激励し支援をしてくれた多くの国民の方々の善意、また、我々を信頼し、留守を守り抜いた家族の力強いバックアップがあったことを忘れてはならない。これ等の方々に対し我々は常に感謝の気持ちを持ち続けよう。

その第2点は、「誇り」について、である。

掃海派遣部隊隊員諸君は、この半年間、ペルシャ湾において、高温多湿、砂塵に煤煙といった劣悪な環境のもと、機雷処分という危険極まりない作業を黙々ととして実施し、船舶の安全航行を確保するという任務を完遂し国際的に多大な貢献をしたことは、実に見事であり、大いに誇りとするところである。これは、ひとえに諸官の自己の使命に対する強い自覚と、それぞれの立場で自己の最善を尽くした努力の賜物であり、諸官もおおいに誇りとするところであろう。だがしかし、「誇り」とは自分の胸の中にソツとしまっておくべきものであり、これを「鼻先」にブラ下げたり、他人に見せびらかしたり、ペラペラしゃべったりするものではない。それをしたとたんに、「誇り」は真の「誇り」ではなくゴミ、チリ、アクタのホコリと化してしまう。

誇り高きOMF隊員諸官、諸官の胸に燦然と輝く、「ペルシャ湾掃海派遣部隊隊員記念章」と同様に、「この誇り」を自分を磨く糧として、自分の心の中に大切に閉まっておき、苦しい時に「何くそ」と自分を奮い立たせる道具として、あるいは、自分自身の心を、人間性を磨く糧として使ってほしい。

第3点は、「錬磨」についてである。

今回のOperation Gulf dawnを通じて我々が見事に任務を果たし得たのは、ひとえにOMF隊員諸官が硫黄島で、MINEXで、あるいは戦技で鍛えた実力をいかに発揮したからにはほかならない。しかし実力は一日にして付くものではない。常日頃からの不断の錬磨の積み重ねがなければ、「いざ」という時の「力の発揮」にはつながらない。誇り高きOMF隊員諸官、早速今日からお互いに切磋琢磨し、腕を磨き、明日に備え、常に鍛えて遅しくなろう。

以上

「感謝」の気持を忘れない。

「誇り」は自分を磨く糧とする。

常に鍛えて遅しくなろう

という三点を申し述べ訓示とする。

これをもってペルシャ湾掃海派遣部隊を解散する。

横須賀、佐世保への安全なる航海を祈るとともに、御家族の皆様によろしく伝えて欲しい。』

本当に素晴らしい隊員達であった。私はこの仲間達と一緒に仕事が出来たことを、この上もなく誇りに思っている。

あれから十年

平成3年4月26日、横須賀、呉及び佐世保のそれぞれの母港を出港した6隻の掃海艦艇は翌々日の28日、奄美大島の笠利湾に集結した。全員が心を一つ西ペルシャ湾の掃海作業に最善を尽くし任務を完遂しようと誓い合った。それから十年たった今年の4月28日隊員たちは横須賀に集い「ペルシャ湾掃海十周年の会」を開催し、その会には当時の総理大臣、防衛庁長官、統合幕僚会議議長、海上幕僚長等も出席した。大きな試練を乗り越え一回りも二回りも遅しく成長した男達と、それを支えた家族達は心行くまで旧交を暖めた。あれから十年、その間の我が国の国際協力に関する進展は目覚ましいものがある。翌平成4年には、「国際平和協力法」が施行され、「国連カンボジア暫定機構(UNTAC)」に自衛隊の部隊が派遣され、それに引き続き5年には「国連モザンビーク活動(ONUMOZ)」へ、6年には「ルワンダ難民救援」のためのザイールへ自衛隊の部隊が派遣された。そして現在でも「ゴラン高原国際平

和協力業務実施計画」に基づき、国連兵力引き離し監視隊（UNDOF）において自衛隊員が活躍している。ペルシャ湾への海上自衛隊掃海部隊の派遣から十年、国際社会の平和維持という崇高な目標のため、黙々と任務遂行に健闘している隊員達に敬意を表するとともに、我が国の国際協力関連業務が更に発展することを願っている。

平成13年10月